

明日は誰が見る？

登場人物

細田

別府

廣中

明転

廣中 いやー、本日はお越しいただき誠に有難うございます。本公演は10本の短編からなる公演となっております。それぞれ、怖い話であったり、不思議な話であったりします。まあー、無いとは思いますが、今回の公演においておかしな現象が起こったり、また、帰宅されてからそういった現象がおこっても一切の責任は取りかねますのであらかじめご了承下さい。それでは、本公演をお楽しみください。

細田、別府、袖から出てくる

廣中 挨拶ってこんなもんで良いんですか？

細田 いいんじゃない

別府 うん。

廣中 いや、なにぶんお客さんの前に出て挨拶するなんて初めての事だからさ、良く分からないし、たぶん当日は緊張しちゃうと思うんだよね。

別府 こんなことで緊張するの？

廣中 廣中のハートは案外ガラスなのよ。

細田 フツ

別府 うわ。ひど。鼻で笑ってるよ。

廣中 あーでたでた。まーた廣中に対するイジメだよ。良くない、良くないよ。

細田 なにが！ なんにも言っていないじゃん。

廣中 ニヤニヤしてんじゃない。

別府 細田さんってそういう所ありますよね。

廣中 本場にそう。弱者の気持ちを分かってない。

細田 なんて。

別府 ほら、また笑ってる。

廣中 いやー、しかし、いよいよ明日が本番かあ。大丈夫かな、セリフ飛ばしそう。

細田 ここまできたら今更ジタバタしても変わらんよ。

廣中 なら、いつその事開き直ってみるってのも手ですかね？

別府 まあ、直前まで台本読み込んで練習はしたほうが良いとは思うけど。

廣中 どっち!?どっちが正解？

別府 どっちも正解だと思っよ。

細田 廣中イジメだ。

廣中 ぬあー！

別府 それはそうと、さっき言った通り、怖い話していると寄ってくるって言うよね。

細田 ああ、聞いたことある。

廣中 またまた、あんなの怖がらせようとしてるだけでしょ。もし仮になにかあったとしても、そんなの心霊現象なんかじゃなくて、なにかきちんとした原因があるに決まってるよ。

別府 あると思っよ。

廣中 思うだけでしょ。実際に起こりゃしないよ。まーさんも、過去にそんな体験したことないでしょう？

細田 無いねえ。

廣中 ほら。

別府 細田さんが無いからって必ずしも無いとは限らないでしょ。

廣中 じゃあ、別府くんは過去そういう体験ある？

別府 過去は無い。

廣中 ほらあ！ 別府くんも無いんじゃないか。

別府 これから起こるかもしれない。

廣中 ええ？

細田 ……百物語ってあるじゃん。

別府 あの怪談を百物語っていくつという、あれですか？

細田 そう、その百物語。あれって百話目の話が終わると本物の物の怪が出るって言われる。

廣中 はあ。

細田 だから必ず九九話でやめないといけない。

別府 それがどうかしたんですか。

細田 いや、いままで練習してきて一体どれくらい怖い話をしたんだろうと思ってね。

別府 ああ、そういう事。

廣中 いや、いや、いや、いや。ない、ない、ない、ない。そんな、そんな都合よく百物語になるはずがない。それに百物語って一晩のうちにはやらないとダメなんじゃなかったっけ？

細田 そうだよ。

廣中 なら……

細田 一晩のうちに必ず九九話までいかないとダメなんだよ。
廣中 え……
細田 つまり、話始めたらず途中で止めちゃいけないの。
別府 それって止めるとなにかおこるんですか？
細田 この場合も、百話終えた時と同様、物の怪が出るっていわれてるね。
別府 ……なるほど。
廣中 なに!? 今の間なに!?
細田 それにね、話してる最中に光を消しちゃいけないそうさ。
廣中 無視!? 無視なの!!
別府 暗転は何回もしましたね。
細田 うん。
別府 確かに明転するたびに……。
細田 うん。
廣中 明転するたびになに!? 明転するたびになんなの!
細田 なーんてね。うそー。
廣中 え
別府 廣中イジメ。
廣中 もおー。
細田 びっくりした?
廣中 しましたよ! ほんと、冗談じゃないっすよ!
別府 ははは
廣中 別府くんも笑ってんじゃねーよ!
別府 いや、ごめん。
廣中 まだ笑ってんじゃねーか!
細田 でも明日は挨拶とかセリフとか大丈夫だよ。きっと。
別府 うん。うん。
廣中 なんですか?
別府 だって、ずっとお客さんがみてたじゃない。
廣中 はあ?
別府 だから、観客は今までもずっといたんだって。
廣中 いや、練習中は我々しかいなかった……ははーん。また俺をビビらせようってか。そうはいかないね。
別府 いや、いたよ。
廣中 いなかった。
別府 いたんだよ。
廣中 別府くん、しつこいぞ。

細田、ため息をついて、鏡を持つ。そして、その鏡を客席に向ける
細田 練習の時からずっといたよ。ほら。

暗転

カカカの怪

登場人物

右田

音無

明転

舞台上に2人の男が立っている。

右田 ここだよ。ここ。ここであの例の事件があったみたいだ。

音無、無言で怯えるように何度もうなづく

右田 聞いた時は驚いたよ。立て続けに3人もいなくなっちゃうなんて。神隠しか人さらいか。なんにせよ、物騒になっちゃったもんだ。

音無、右田のそでを引っ張って前を指さす。

右田 ん？ なんだ。なんか見つけたのか。

右田、目の前をよく見てみる

右田 うおっ！ ……ってなんだ。ただの人形じゃねーか。ビビらすなよ。心臓とまるかと思っただじゃねーか。

音無、ゴメン、ゴメンと言ったように片手で謝る

右田、人形を拾いに行き、また戻ってくる

右田 まあ、こんな暗がり到人形が置いてあんだから怖いけどさあ。つーかなんだこの人形。見たことないタイプの人形だな。木でできてんのか？ ……ん？ なんか背中の部分に書いてあるな。暗くてよく見えないな。

音無、懐中電灯を取り出す

右田 おお。良いもんもってんじゃねーか。……懐中電灯もってんなら最初からだしてくん

ない？ なぜ出さない？ なぜ真っ暗な中歩いた？ 俺たち道中何回も躓いたよね
!?

音無、少し考えてうなづく。

右田 なにをうなずいてんだ。まあ、良いや。ちょっと照らしてくんない？

音無、右田を照らす

右田 俺じゃねーな。

音無、え？ という表情

右田 考えたらわかるだろう。俺じゃないって事くらいはさあ！ 人形だよ、人形。

音無、人形を照らす

右田 なになに。『ちから、ちから、ちから』？

音無と右田、顔を見合わせて首をひねる

右田 なんだそりゃ。なんで背中に3つもちからって書いてあんのよ。物凄い背筋って事？

音無、首をひねりながらもうなづく

右田 嘘つけ。全然納得していないじゃねーか。俺さえも納得していないのにましてやお前が納得なんかするもんか！

音無、中途半端な顔

右田 なんだその中途半端な顔は！ 悲しくなるわ！ ……ちゅーか、音無、お前今日一言も喋ってないな。どうした？

音無、自分の喉を指さし、声がかすれて出ないというジェスチャーをする

右田 なんだ風邪でもひいたのか。まあ、そんなときは無理にしゃべらないほうが良いか。

事情は分かった。お前なりになんとかリアクションをとってくれてたんだな。

音無、右田の肩をたたき、サムズアップ

右田 ありがとな。なんか怖くなくなってきたな。ひとがここで忽然と姿を消すって聞いたから来てみたけど特になんも変わったことは無いしなあ。

音無、うなづく

右田 まあ、人攫いはあるのかも知んねーが、二十一世紀のこの世の中で神隠しってのがあるとは思えないんだよな。そうそう、神隠しと言えばさ、こんな話知ってるか。昔、昔、このあたりで神隠しが良く発生してたそうさ。暗い夜道を歩いてるとな、どこからともなく不思議な人間が歩いてくるんだそうさ。その人間はカクカクしてて歩くたびに木と木をぶつけるような音がするんだと。ただそいつに出会ったからって神隠しにあうわけじゃなくて、そいつが神隠しをした人間？ だったか魂？ なんだったつけ。まあ、それと出会って、尚且つ、そいつに笑われたら神隠しにあっちまうんだとき。……制約多すぎねえか。

音無、うなづく

右田 そんなややこしい条件そうそうそろわねえだろ。なんだよ笑われたらって。……ん？ なんだあれ。

右田 遠くのほうを見る

右田 人形……？

右田、人形の近くまで行く

右田 ? さっき人形を拾った時には無かったような気がするんだけどな。3体も並んでる。怖っ！ 目、ビー玉みてーじゃん。こっわ！

音無、うなづく

右田 なんだよ。さっきから急にリアクションとらなくなったな。さてはビビっちまったのか。

さつきが見えないから先が見えない。

登場人物

男A

男B

明転

- A ……でさあ。……おい。おい！ 聞いているか。どうしたんだよポケっとしてさ。
- B うん？ ああ。いや、ちょっと。
- A なんだよ。
- B なんでもない。
- A 気になるじゃねーか。言えよ。
- B 何でもないんだって。ただポケっとしてただけだよ。
- A 人と話してるのに？
- B うん。
- A うん。じゃねーよ。お前、話くらい聞いとけよ。
- B 悪い、悪い。んでなんだっけ？
- A だからあ……うお。あぶねえ。
- B 大丈夫か？
- A おお。ここだけアスファルトに穴が開いててさ。躓いちまった。
- B え……
- A ん？ どうした？
- B い、いや、それにしても不運だったな。
- A 不運ってほどの事でもないけどさ。
- B コケなくて良かったな。
- A まだそこまで足腰衰えちゃいねーわ。
- B まあ、このくらいならコケはしないか。
- A コケはしないな。
- B いや、いや、本当にコケなくて良かったよ。
- A どうした。えらく心配してくれるじゃないの。
- B 実はさ、さつきボーっとしてたろ。
- A うん。
- B その時にさ、お前が躓くところが見えてさ。
- A ……はい？

B 変な事言ってるのは分かってる。でも、本当に見えたんだよ。
A もう良いよ。俺がコケそうになってたからって。
B からかってるわけじゃない。本当なんだよ。
A 分かった、分かった。そこまで言うなら証拠見せて見ろ。
B 証拠？
A そうだよ。見えたって言う証拠があれば信じてやるよ。

B、はっとしてAの手を引く。

A 花瓶？

B ああ。

A なんでこんなもんが突然降ってくるんだ。こんなもんあたってたらシャレになねーぞ。
B な。これで信じてもらえるか。

A あ、ああ。本当に見えてたんだな。でもどんな風に？

B 少し進んだ先に俺とお前の姿が見えたんだ。いや、見えてるんだ。今もずっと。

A 今も？ じゃあ、お前は今その姿が見えてるってのか？

B ああ、見えてる。今も俺とお前は歩いている。
A と言うことは、先に歩いてる俺たちに起こっている出来事そのまま起きてるって事か？

B 多分そういう事だと思う。おそらく、前の俺たちに何かが起こったところまで俺たちが到着すると同じ事が起きるんだ。

A おい、おい、おい、おい。不思議体験だなあ。おい。

B あっ。そろそろだな。

A 何だ。何か起こるのか！

B いそいでその場にしゃがめ！

A、いそいでしゃがみ込む

B 右足のところを見てみる。

A これは……

B 十円だ。

A いらねえよ！

B バカ、十円を笑うものは十円に泣くんぞぞ。

A 突然しゃがめなんて言うもんだから大事が起これると思ったじゃねーか！ ビビらすん
じゃねーよ！ ほっとけ十円なんて。

A、十円玉を投げる

B 前にお前も十円投げてたよ。

A そりゃ、投げるわ！ 不必要に焦らせやがって！

B 悪い、悪い。なんだか面白くなってきちゃって。

A ったく、たちが悪いな。しかし、なんで俺には見えないんだろ。

B 人間力の差じゃない？

A なんだと!?

B あっ！

A なんだ。突然大きな声だして。また俺の事ビビらせようとしてんのか。

B やばい、やばい、やばい、やばい、やばい。

A なんだよ！ どうしたんだ。

B 前にお前が刺された。

A 刺されたあ!?なんで！

B さっき投げた十円がおかしな奴に当たったみたいだ。

A はあ!?

B このままじゃ確実に刺されるぞ。お前が刺される地点に行くまでになんとかしないと。

A どうするんだよ。なあ！

B 待て！ 今、考えてる！

A 頼むぜ、おい。

B そうだ！

A なんか思いついたのか！

B ああ。

B 歩くのやめてみるか。

A おお！ その手があったか。

B うわ！

A うお！

B 勝手に足が動いてる。なんだこれ。

A と、止まらねえ。

B あそこまで歩いて事は確定事項なのか。

A どうすんだ。

B 待てよ？ 今、前に俺たちが居るって事は当然後ろにも俺たちが居るって事だよな。

A どういうことだ？

B つまり、前にいる俺たちは俺たちにとって未来の俺たちだ。

A おう。

B そんなで、未来の俺たちの後ろにいる俺たちが現在だ。

A そうだな。

B 　　って事は、俺たちよりも後ろにいる、言わば過去の俺たちが居るって事だ。
A 　　それがどうしたってんだ。
B 　　だから！ その過去の俺たちに何が起こるか教えんだよ！
A 　　そういう事か！ でも、さっきみたいにできないって事はないか。
B 　　あー、もう！ もたもたしてる暇はないぞ。そろそろ着いちまう。
A 　　どうやって教えるんだよ。
B 　　簡単だよ、後ろを向いて教えんのさ。
A 　　なるほどね。分かりやすくってそういうのは好きだ。
B 　　よし、振り向くぞ！
A 　　振り向けない……。やっぱり駄目だったのか。

A、ポケットに手をつ突っ込む。何かを見つける。

A 　　ん？
B 　　どうした。
A 　　いや、何でもない。あのさ。
B 　　なんだよ。
A 　　未来の俺たちと違う事すれば良いんだよな。
B 　　そうだよ。
A 　　そっか。……そっか、そっか。
B 　　何か思いついたのか？
A 　　おお。
B 　　どうするんだ？
A 　　こうすんだよ。

A、ポケットからナイフを取り出してBに刺す。B倒れる

B 　　なんで……
A 　　刺されたのが俺じゃなくてお前だったら、俺は問題ないからな。これで未来は変わったな。ってことは、これももう振り返れるのかな。

A、振り向く

A 　　後ろがない。真っ暗だ。ああ。未来と違うことをしたから過去が無くなったんだ。成功だ！ 助かったぞ！

A、再度前を向く

A　なんで前も真っ暗なんだ？　……そうか、過去が無くなったから未来も無くなったのか。これから俺どうなるんだろ。先が見えねえな。

暗転

魂騙し

登場人物

落語家

鬼

落語家が座布団の上に座って居る

落語家

えー。世の中には普通の人じゃ見えないものが見える人ってのがいるもんですな。もちろん普通の人が見えないものですから、おおよその人は見たことが無いんでしょう。問題なのは、その見えないものってのがどんなものなのか分からない、って事でしょう。見えないもの、見えないもの……先行き？ ……愛？ ……思いやり？ まあ、様々ありますが、中でも幽霊やあの世、それにまつわる物事ってのは昔から見える人には見えるってのはなしです。しかしやっぱり多くの人にはその話が本当かどうか分からない。でも実はあたしは見たことがあるんです。これはその時のあたしのはなし……

落語家、立ち上がる

鬼、登場

落語家

おや、ここはどこだ？ あたしやいつのまにこんな所にきたんだろう？

鬼

まってたぞ。ここはお前ら人間が言うところのあの世ってやつだ。

落語家

うわあ！ びっくりした。おにいさん、いきなり声をかけられちゃ、心臓がとまっちゃまう。

鬼

だからお前の心臓はもうとっくとまってるよ。

落語家

またまた、おにいさん冗談きついや。あたしの心臓がとまってるって、そんなバカなこと……止まってる。あら、あら、あら、こりゃあ大変だ。おにいさん、あたしやなんで心臓がとまってるんですか。

鬼

だからここはあの世だと言ってるだろう。お前は死んだんだ。

落語家

ええ!? 本当ここはあの世なんですか。

鬼

そうだ。さっきからお前も俺の事を鬼さんと呼んでるじゃないか。

落語家

？ あたしはおにいさん……鬼さんかあ。こりゃどうやら本当に死んじまったらしい。

鬼

だから何度もそう言ってるだろう。

落語家

鬼さん、鬼さん、あたしやまだ死ぬわけにはいかないんです。なんとか生き返らせ

てもらえはしませんかね。

鬼 それはダメだ。理として一度死んだ者を生き返らすことはできない。

落語家 そこをなんとか。

鬼 だめなものはだめだ！

落語家 そこをなんとか

鬼 ダメだ

落語家 なんとか

鬼 ダメだ

落語家 なんとか

鬼 ダメだ。しつこいぞ。

落語家 そりゃあ、しつこくもなりますよ。こっちは今、文字通り生きるか死ぬかってとこ

ろなんですから。少しくらいしつこくたって良いでしょう。

鬼 う、うむ。しかしなあ、死んだ者を生き返らせるわけにはいかないのだ。お前が死

ぬのは運命だったんだ。変えられん。

落語家 運命だなんてそんな。死ぬことが運命だなんてそんな事がありますか。

鬼 しかし、遅かれ早かれ命あるものは皆平等に死ぬだろう。お前が死んだことは運命

だったのだ。諦めろ。

落語家 何故あたしがこの年で死ななくちゃならないんですか。それが何故運命だってわ

かるんですか。

鬼 それはな、この用紙に書かれている事だからだ。この用紙には誰がいつ死ぬかと言

うことがすべて書いてある。

落語家 ちよっとそれ見せてもらってもよろしいですかね。

鬼 ダメだ。これはおいそれと見せられるものではない。

落語家 もしかしたら別人っていう可能性もあるんじゃないですか。

鬼 いいや。そんな事はない。現にお前は今死んでいるじゃないか。この用紙に書かれ

た通り死んでいる。と言うことは別人ではないと言うことだ。

落語家 こりゃあ、認めざるを得ないか。

鬼 うぬ。

落語家 しかしねえ、鬼さん。

鬼 なんだ

落語家 こっちはいきなり死んで運命だって言われて素直に何もなくてはい、そうですかっ

て具合にはいかないんですよ。

鬼 今しがた、認めると言ったばかりではないか。

落語家 ええ。認めはしますがね、ちよいとばかりお願いを聞いてほしいんです。

鬼 お願い。

落語家 はい。

鬼 何だ。言ってみろ。

落語家 ちよつと残された人達のところへあいさつに行きたいと思ひまして。

鬼 挨拶？

落語家 ええ。あまりにも突然の事でしたんで挨拶くらいはしとこうかと思ひまして。

鬼 なるほどな。

落語家 でしたら……

鬼 だがそれは出来ない。

落語家 何故？ また決まり事ですか。

鬼 そうだ。以前同じことを言ったやつがいてな、その時は余りにも熱心に言うものだから根負けして認めたのだが

落語家 なら、あたしも……

鬼 まあ、待て、まだ続きがある。認めたのだが、いざ現世に戻ったらそこにはそいつの死体もあったものだから大騒ぎになつてな。

落語家 ん？ 同じ人が2人いたつてことですか。

鬼 そうなるな。

落語家 いやあ、あたしははてつきり魂の状態で行くものとばかり思つてましたよ。

鬼 魂？

落語家 ええ。こう、人が亡くなった後、体から抜けでるものですよ。違ふんですか？

鬼 聞いたことがない。

落語家 じゃあ、あたしは今どういう状態なんですか。

鬼 うむ。そうだな、以前の体から生まれた新しい体と言つたところか。

落語家 そんなそれじゃあ、脱皮じゃありませんか。虫じゃあるまいし。

鬼 まあ、感覚的に一番似ているのはそうかも知れないな。とにかく、新しい体として存在している。

落語家 と言うことは、魂の様にフワフワ漂うもんじゃないつて事ですね。

鬼 漂う？ 魂とは漂うものなのか？

落語家 え、ええ、一般的にはフワフワと漂うもんですね。

鬼 どんな形で漂っているのだ。

落語家 えーと、こう、丸い形をしましてね、大体、夏場に墓地の周辺で大量発生します。

鬼 ……虫じゃないのか？

落語家 あつ……いや、話だけきくと虫みたいではありますけどね、決して虫ではないんですよ、ええ。

鬼 うーむ。やはり知らないな。色はどんな色だ。

落語家 色ですか。色はですね、大体薄い青色に発光してますね。こう、しっかり発光してゐるわけじゃなくて、うすーく、ぼんやりと発光していると申しませうか。

鬼 蛍……のようなものか？

落語家　ですから虫じゃあ、ありませんって。あー、こうなったら魂を捕まえてごらんに入
れましょう。

鬼　うむ、捕まえてと言うことは網やカゴが必要か？

落語家　それじゃあ、虫取りじゃないですか！

鬼　少しふざけただけだ。

落語家　全く。それじゃあ、魂を捕ってきますんでちょっとくら現世まで戻らせちゃくれませ
んか。いや、なに、決して他の人には見つからないようにしますんで。

鬼　そうか、ならば魂を捕ってきたらすぐ戻って来るんだぞ。

落語家　ええ、ええ、分かっています。パツと捕ってきて、ピヤツと戻ってきますんで。

鬼　うむ。ならば信じるぞ……

暗転　鬼ハケる。落語家再び座布団へ

落語家　こうやってあたしは魂を捕ってくるという名目でこの世に戻ってきたと言うわけ
です。まあ、魂なんて、あたしも見たことは御座いませんが、戻って来ちまえばこ
っちのものです。いやー、鬼にも見えないものつてのはあるんですね。いずれにせ
よここまで来ちまえばバレるはずはありませんがね。

落語家、倒れる

落語家　おや、ここはどこだ？　あたしやいつのまにこんな所に来たんだろう？

鬼　待ってたぞ。

中にいるヒト

登場人物

住人

幽霊？

明転

住人 僕はもう何日も外に出られていません。いや、外に出ようとはしているんです。でも怖くて外に出られないんです。はじめは、ちょっとしたラップ音でした。古い木造のアパートなので単なる家鳴りだと思って気にも留めていませんでした。そうのち、階段を上がる音がしてきて、それも他の住人の足音だと思っていました。だけど……

ダンダンダンダンダン！ ドアをたたく音が響く

住人 ほら、来た！ 僕の部屋のドアをたたくようになったんです。ドアをたたくのも始めは夜のうちだけでした。でも、ある日を境に日中もドアがたたかれるようになったんです。もう怖くて玄関から出られません。そ、それに最近は偶に部屋の中にナニカが居るような気がするんです。姿ははっきりとは見えませんが、とにかく、ナニカが居るんです。

ダンダンダンダンダン！ ドアをたたく音が響く

住人 ひい！ また叩いてる。不思議な事はこれだけじゃ無いんです。最近は何に出ていると言いましたが、どうもおかしいんです。水道、電気、ガスなど、光熱費を支払っていないのに止まる気配がありません。それだけならいざ知らず、冷蔵庫の中身がどれだけ使っても翌日にはすっかりもとに戻ってるんです。僕は一体どうしてしまっただけでしょう。

ドアが開く音

住人 え？ い、今ドアが開いて……

幽霊、袖から現れる

住人 どうとう、見えた。とうとう……とうとう。

幽霊、無言で歩き回り、ハケる

住人 消えた、のか？ いずれにせよ部屋の中まで入ってきたのは間違いない。どうしよう、どうしよう……。

住人、うろうろと歩き回る

住人 そうだ、今のうちにこの部屋から出よう。

住人、部屋からでようとする。突然水が流れるの音

住人 はぁ？ 水の音？ なんで？ い、いるのか。消えたわけじゃなくてまだこの部屋に。

突然テレビの音が聞こえる

住人 ！? 次はテレビ。テレビは向うの部屋にあるから、ひとりでについたとしか考えられない。

テレビがザツピングされる音、その後、砂嵐の音が続く

住人 うわー！

住人、物凄い勢いで外へ飛び出す

暗転

明転

舞台にはさっきの幽霊がいる。

幽霊 はぁー。めんどくさいなあ。中にいるヒト早く出て行ってくれないかな。おーい、出てっくれー。

幽霊、ドアを叩く

幽霊 おーい、ドアの音聞こえてんだろー。

幽霊、ドアを叩く

幽霊 もー。出て行かないし。しょうがねえな。

幽霊、ドアを開け部屋に入る。

幽霊 あれ？　なんか驚いた顔でこっち見てる。さてどうするかな。

幽霊、グルグル歩き回り

幽霊 とりあえず、手でも洗って、テレビでも見ながらゆっくり考えるか。

幽霊、手を洗う、水の音。その後、座り込み、テレビをつける

幽霊 うーん、あんまりおもしろい番組やってねえな。ん？　なんだか騒がしいな。はは、砂嵐になっちまった。すげーな。

バタバタと音がした後、ドアが閉まる音

幽霊 ふー。ようやく出て行ったか。……もしもし、はい。出ていきましたよ。ええ。ん？　どこに行ったか？　それは分かりません。ただ、この部屋にはもうあらわれませんよ。ええ、はい。あの様子じゃ気が付いてなかったみたいですからね。ええ、偶にいますですよ。自分は生きてるって思いこんでる霊ってやつが。成仏？　ああ、そりゃしてませんよ。私はお祓いが出る人じゃありませんし。どこかにまた現れるかもしれないませんね。それこそあなたの家かもしれないよ。ははは。冗談ですよ。でも、まあ、一応お気をつけて。

暗転

半年以上封鎖された街で
徐々に僕らはこの狂った世界に慣れ始めていた

登場人物

堤

鈴木

長谷川

ラジオから声が聞こえる。

録音された音声。さほど長くない内容を繰り返して伝える。

「……間もなく救助が行われます。」

救助の実施まで外出は可能な限り自粛してください。

なお、永眠後遊行感染症患者の保護は、

症状のない方の救助が終了したのちに行われる予定です。

繰り返します……。」

堤 ……。

鈴木 ……。

2人の男、堤、鈴木が傍らにラジオを置いてトランプに興じている。

テキサスホールデムポーカー。

チップの代わりに菓子を使っている。

突如ラジオの音声途切れる。

堤 あ。

鈴木 電池切れだ。

鈴木、ラジオを見て。

鈴木 じゃあ、これ負けたほう。

堤 マジか。……チェック。

鈴木 よし。セーの

2人、手札を開く。

堤 ジャックのワンピース。
鈴木 フルハウス。じゃ、よろしく。
堤 なんだよ。

鈴木、堤にラジオを渡す。手回し充電式。
堤、ハンドルを開いて回す。
鈴木、堤の前に置いてあった菓子を取り、一つ食べる。

鈴木 遅いなあ。
堤 あ？
鈴木 長谷川。
堤 ああ。まあ、近くのスーパーやらコンビニやらはカラになっちゃったし。ちょっと遠く行ってくつて。
鈴木 歩いて？
堤 いや、ほら、昨日バイク見つけたじゃん。
鈴木 ああ、あのポロポロの？
堤 うん。多分あれで。ガソリンちょっと残ってたんだって。
鈴木 あれ原付じゃねえぞ。あいつ免許持ってないだろ。
堤 いやいや。捕まりゃしないよ。警官なんかもうろついてないし、うろついてたらそいつ死人だろ。
鈴木 死人じゃない、永眠後遊行症患者。
堤 どっちだっさいいよ。

話していると、玄関のドアノブが音を立てる。
ハッと少し身構える2人。手近に置いていた角材を手取る。
ドアが勢いよく開いて、大きな荷物を抱えた男が顔を出す。長谷川。

長谷川 ただいま。
堤 おお、お疲れ。
鈴木 ただいまじゃねえよ、ノックしろって言ってるだろ。
長谷川 ああ、ごめん。コレ重くて。

長谷川、持っていた荷物を降ろす。重そう。
片手にどす黒い血の付いた角材を握っている。

鈴木 お前馬鹿か、そんなもん中に入れんな、外に置いとけ。

堤 お、何。何体かやった？

長谷川 3体。内1体が……こちらです。

長谷川、にやりと笑いながら、ポケットから何やら取り出す。

首からかけるタイプの社員証。血まみれで判別困難。

堤、社員証を受け取って。

堤 うお、支店長じゃん。

鈴木 うそ。

鈴木、堤から社員証を奪って確かめる。

鈴木 本当だ。やったな、長谷川。

長谷川 もっと褒めてもいいんだよ。

言いながら、長谷川、荷物の中から何やら取り出す。

ビニール袋に入っている。

堤 何それ。

長谷川 ウサギ……か、ネズミの仲間みたいなの。ほら会社の近くにペットショップあるじゃん。あそこで。

鈴木 勅使河原用？ 死んでたの？

長谷川 いや、もう死にかけてたみたいだったから殺した。

言いながら、長谷川、ビニール袋を持ってクローゼットに近づく。

クローゼットの取っ手に手をかけようとしたところで、

堤 気をつけろよ。腹減ってるみたいで荒れてるんだ。

長谷川 うん。……ほれ、差し入れ。

クローゼットを開けて、中にビニール袋を放り込もうとする。

と、中から手が出てきて長谷川の襟首を掴みかける。

長谷川 うわ、お前、ふざけんな。飯はそっちだよ。

長谷川、何とか手を振り払ってクローゼットを閉める。
怪我がないか腕や胸元を確かめつつ、

長谷川

だんだん荒っぽくなってねえかあいつ。

鈴木

仕方ないよ、もう一週間以上あの中だもん。

長谷川

焦った……。

長谷川、怪我がないことを確認すると、改めて荷物を広げる。
荷物を取り出しながら、

長谷川

勅使河原は、ウサギ肉。俺らはコレだ。

取り出したのは、酒類の瓶やビールの缶。

堤、鈴木、色めき立って、

堤

嘘だろ、酒か。やった。

鈴木

どこにこんなもん残ってたんだ。

長谷川

会社の地下倉庫。あそこの鍵持ったまんま支店長がこうだったから、

長谷川、手をだらりと前に出して、口を半開き、目をうつろに。

「あー」「うー」と唸り声をあげる。

鈴木

それで手つかずだったのか。やったなあ。

堤

あー、旨い。

堤、すでにビールの缶を開けている。

長谷川

早いよ。せめて乾杯とかしようや。

堤

うるせえ、どうせお前も見つけたときちよっとは飲んだだろ。

長谷川

バレたか。いいだろ、俺は今日のMVPだぞ。

堤、立ち上がって、

堤

えー、それでは本日のヒーローインタビューです。長谷川さん、これを発見したときはどんな気持ちでしたか。

長谷川、堤の口上を受けて立ち上がり、

長谷川　そうですね、日頃の良い行いがようやく報われたかと思いました。

鈴木　ブーブー。

堤　長谷川さん、ブーイングが起こっています。

長谷川　言わせたい奴には言わせておきましょう。

鈴木、手をあげて、

鈴木　はい。倉庫のカギはどうやって奪ったんですか？

長谷川　会社についたら、遠目に支店長が見えました。遠くからでもフラフラ歩いているのがわかったので、これはもう死んでいるに違いないと思い、日頃の恨みを晴らさんと武器を手につっくりと近づきました。

長谷川、近くに転がっていた角材を手に取り、当時の状況を再現しようとする。

堤　で、後ろからガツンと。

長谷川　それがあと一步というところでこちらに気が付き、襲い掛かってきたんです。

堤　おお、それは危ないですね。

長谷川　それをこうやって受け止めて、こう……ちょっと立って。

説明が難しくなり、鈴木を立たせて支店長役に。

長谷川と鈴木が取っ組み合い。

鈴木　うあー……。

長谷川　こう体重をかけてきたところをいなしておいて

言いながら、長谷川、鈴木をいなしてよろめいたところを

持っていた角材で打つふりをする。

はずが、勢いあまって角材が鈴木の頭に当たる。

鈴木、その場に倒れる。

鈴木 痛って、
長谷川 あ、ごめんごめん、当たっちゃった。
鈴木 痛いなあ、

鈴木、立ち上がりざま、転がっていたもう一つの角材を掴み、
長谷川の側頭部を打ち据える。
声も上げず倒れる長谷川。

鈴木 痛あ……調子乗るといつつもコレだ。家の中で振り回すなよこんなもの。
堤 おーい、大丈夫か……、

堤、薄笑いを浮かべながらかがんで長谷川に声をかける。
少しして、顔色が変わる。

堤 おい、動かねえぞこいつ。
鈴木 え、

鈴木、長谷川をゆすったり口元に耳をあてたりして生死を確かめる。
死んでいる。
しかし、2人の会話に深刻さはそれほどない。

鈴木 うわ、死んでるわ。
堤 怖いわお前、やりすぎだろ。
鈴木 こんな簡単に死ぬかね、普通。
堤 どうするこれ。
鈴木 なんか人工呼吸とかしたほうがいいんかな。
堤 え、俺やだよ。
鈴木 俺だってやだよ。
堤 じゃあどうすんのこれ。
鈴木 置いといたら腐るだろうしなあ……
堤 外に捨てる？
鈴木 いや、玄関前に肉があったらあいづら寄ってくるだろ。
堤 そうか……
鈴木 あ、
堤 何？

鈴木、クローゼットを指さして、

鈴木 勅使河原に嘸ませたら？

堤 何だって？

鈴木 ほら、嘸まれたら感染するじゃん。で、したら生き返る。

堤 すでに死んでもイケるのか？

鈴木 まだ死んだとこだから平気だろ。あと、生き返ったら殴られたこととか忘れてる。

堤 お前はひどい奴だな。

鈴木 よし、じゃあそっち持って。

鈴木、堤それぞれ腕と足を持って長谷川の死体を持ち上げる。

鈴木 セーの、

堤 よいしょ。

そのままクローゼットへ。

鈴木、一旦死体を降ろしてクローゼットを開ける。

何かに驚いた様子で、

鈴木 おっと。こっちこっち。

言いながら、2人、長谷川をクローゼットへ入れる。

クローゼットの扉を閉める。

鈴木 よし、続きやろ。

堤 次チップ何にする？

鈴木 ビールは？

堤 そんなに数ないよ。

鈴木 お、スピリタス発見。あ、じゃあ、ババ抜きにして、負けたほうがコレ1杯飲む。

堤 うわきつつ。

堤、ラジオのスイッチを入れる。ラジオからいつもと同じ声が流れる。

「……間もなく救助が行われます。

救助の実施まで外出は可能な限り自粛してください。」

鈴木、1杯飲む。

堤、1杯飲む。

鈴木、1杯飲む。

堤、立て続けに2杯飲む。

堤、さらに1杯飲むうとして、コップを置いて立ち上がる。

トイレへ駆け込む。

鈴木
だいじょうぶかー。

堤
(嗚咽)

クローゼットから物音。かすかな唸り声。

鈴木、「おっ」と気が付いてクローゼットへ。

向かいながら、

鈴木
長谷川、起きたー？ 今堤がさあ、

クローゼットを開けて、すぐに閉める。

鈴木
堤ー、ロープ持ってきて。コイツ出てこないように縛らないと。

暗転。

ラジオが鳴っている。

「……繰り返します。隔離地域の皆様、決して自暴自棄になることな
く、

協力して生き延びてください。

間もなく救助が行われます。……」

ラジオが途切れる。

マジヤバイ

登場人物

馬路

矢場井

舞台中央に鞆が置いてある。

馬路、スマホを操作しながら歩いてくる。

鞆に気が付かず、つまづく。

(以下、【 】は副音声。実際には声に出さない)

馬路 ……マジ。【痛って】

鞆に気が付き、

馬路 マジ? 【なんだよこれ。落とし物か?】

あたりを見渡す。

人通りは少なく、落とし主らしき人は見当たらない。

馬路 マジ? 【誰もいないじゃん】

しばらく考え、ともかく中身を見てみることにする。

チャックが固い。

馬路 ……マジ。【固いなあ】

苦労の末、チャックが開く。

中を覗き込む。

と、何やら大事そうにしまっただる箱を見つけ、取り出す。

馬路 マジ? 【なんか高そうなものが入ってるけど】

そこそこの重量がある。

振ってみる。音がする。ゴトゴト。

馬路

マジ？【なんか入ってるな】

開けようとする。が、開かない。
鍵がかかっている。

馬路

マジ〜？【何だよ、面白くないな】

こじ開けようと力を入れる。

馬路

マジ……【開きそうな感じはするけど……】

と、だれかが近づいてくる気配を感じる。
箱を持ったまま身を隠す。

矢場井、現れて、

矢場井

ヤバイ、ヤバイ。【ここに置いたはず。あれをだれかに見られたらまずいぞ】

鞆に近づく。

口が開いていることに気が付き、

矢場井

ヤバイ。【鞆が開いてる。だれかに見られたか？】

中を確かめる。入れていた箱がない。

矢場井

ヤバイ、ヤバイ、ヤバイ。【なくなってる、最悪だ】

焦りだし、周囲を確かめる。人影はない。
箱を持っていった人間を探そうと走っていく。
しばらくして、馬路、姿を現し、

馬路

……マジ？【絶対コレ探してるよな】

もう一度箱を振る。ゴトゴト。
いくつかのモノが入っているようだ。

馬路 マジ……？【中身が気になる。何とか開けてみよう】

近くにあった道具を使って何とかこじ開ける。

馬路 マジ！【やった、開いた】

改めて中を覗く。

一番上にあったモノを取り出す。

何かのお守りのようなもの。

ただし、ずいぶん痛んでいる。

馬路 マジ？【何だこりゃ。大事にしまったが割に面白くないな】

二つ目。

黒い表紙の本。

何やら文字らしきモノが書いてあるが読めない。

馬路 マジ……？【読めないし。なんだよ、こんなものばかりか？】

次。

何人かが写った写真。

そのうちの一人を除いた全員顔の部分に針で開けた穴が無数にある。さらにそのうち数人の顔にはその上から赤いバツ印。

馬路 ……マジ？【え、なにこれ怖っ】

少し寒気がして、写真を捨てる。

なんだか嫌な予感がするが、次のものを取り出す。

蓋のついた容器。中は見えない。

馬路 マジ……【うわー、なんかいやだなあ】

嫌悪感を感じるが、好奇心が勝り蓋を開ける。

中を覗き込む。

短い悲鳴。

容器を投げ捨てる。中からクモやサソリ等の虫がいくつか出てくる。

馬路 マジ！マジ、マジ！【うわ、きも、何、だよこれ】

馬路、思わず後ずさり。

いつのまにか戻ってきていた矢場井にぶつかる。

馬路 マジ？【あ、しまった】

矢場井 ……ヤバイ【コイツがもってたのか】

矢場井、容器と、散乱した中身を見て、

矢場井 ヤバイ。【あーあ、やっちゃったよ。最悪。】

矢場井、虫の一つを拾い上げる。

その隙に馬路、そろそろと逃げようとする。

矢場井、気が付いて手に持っていた虫を投げつける。

馬路 マジ！【うわー！】

矢場井 ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ【せっかく苦労してここまで準備したのに台無しになっちゃったじゃないか】

矢場井、言いながら馬路に詰め寄る。

馬路、気おされて尻もちをついて倒れる。

馬路 マジ、マジ、マジ！【すいません、ちょっと好奇心で開けちゃいました。ほんとすいません。もう忘れるんで許してください】

矢場井 ヤバイ【あー……】

矢場井、馬路の髪を掴み、乱暴に引き倒す。

馬路、頭を抑えて倒れる。髪が何本か抜けたようだ。

矢場井、引き抜いた髪を見ながら。

矢場井 ヤバイ【こんなことに使いたくなかったけど】

懐から何やら取り出す。

藁人形。

藁人形の腹部に馬路の髪の毛を押し込む。

馬路

マジ、マジ……【こいつあぶねえヤツだ。まずい奴と関わっちゃった】

四つ這いで逃げようとする。

藁人形に髪を押し込み終えた矢場井。

馬路を見下ろしながらおもむろに藁人形の右腕をねじる。

悲鳴をあげてうづくまる馬路。

馬路

マジマジマジ【痛い痛い、う、嘘だろ】

矢場井

ヤバイ……【うわ、こんなに効果テキメンなんだ】

続いて左足。悲鳴。

矢場井

ヤバイ【楽しくなってきた】

馬路

マジ……【勘弁してください、助けてください】

腹を押さえる。えずく。

矢場井、藁人形を投げ捨てるように地面に置く。馬路の背中に痛み。

矢場井、懐から長い釘と木槌を取り出す。

釘を藁人形の頭にあてがう。

馬路を見て、うっすら笑う。

馬路

……マジ？【……マジ？】

矢場井

……マジ【……マジ】

馬路

……ヤバイ【……ヤバイ】

矢場井、木槌を振り上げる。

暗転。

カーン、という乾いた音。

約三人

登場人物

A
B
C

A 暇だな。おい。

B 暇だなあ。

C 『暇だな』

A 何かメシでも食っていくか？

B だな。何食う？

A あー、何でも良い。

B でたよ。何でも良いが一番困るんだよな。

C 『決めるに決めきれんと言うか』

A そんなこと言っちゃって、今食べたいものがこれと言って特にないんだよ。さりとて腹は減っている。そんな時に何食うってきかれたら、そりゃあ……

C 『何でも良い！』

B 何でも良い！

A になるわなあ。

B かといって決めないわけにもいかんしな。

A うむ。腹自体は最高に減っている。

B もうラーメンとかで良いんじゃない？

C 『確かに、迷ったらラーメンって言うし』

A そうだな。迷ったらラーメンは鉄則だしな。

B しかし、この辺を歩くのも久しぶりだな。

C 『あー。昔は良く歩いてたもんだけどなあ』

A そりゃ、高校卒業して以来だから、十年ぶりくらいか。

B もうそんなになるか。

A この町もすっかり変わっちゃったな。

C 『変わってない場所だってあるだろ。例えば、ほら……』

B うおー。この公園まだあったのか！ 懐かしいなー！

A この砂場に俺たちの王国を建てたよな。

C 『小学生のころな。』

B いつの話してんだよ！ そーいや、あの時滅茶苦茶はしゃいでたよな。

- C 『いや、あの時一番はしゃいでたのはお前だ。』
- A はしゃぎすぎてせっかく作った砂の城をぶっ壊したよな。
- B そうだったけ？
- C 『そうだよ。あの城作るのにどんだけかかったと思ってんだ』
- A かなり苦勞して作ったのによ。
- C 『なんか、城を粉碎したときにお前、なんか行ってたな』
- B 形あるものいつかは壊れるんだ。破壊無くして創造は無い。
- A 言ってたな！ そんな事！
- C 『つーか、未だに言ってるのかそんな事』
- A 今年でいくつよ。
- B 心はまだまだ少年なのよ。
- A もう俺たちは立派なおっさんだ。心は少年とかただただキモチワルイだけだぞ。
- C 『見て見ろ！ 鳥肌が立ったじゃねーか！ 謝れ！』
- B すまんすまん。そんなにキモチワルがらなくなつて良いじゃねーか。
- C 『まだ言うか！』
- A 鏡でその疲れきった顔みてる。なんだか不憫に思えてくるぞ。
- B そんなに!?
- C 『なんかモアイみたいな顔してるよ』
- A 目に影出来てるもん。
- B ええ!?!めっちゃ体調悪そうな人じゃん。
- A ああ。仕事に夢も希望も無いって顔してる。
- B でも、確かに昔想像してた未来じゃない事は確かだな。
- C 『んー。まあ、未だにこうやって遊べる友人が居るって事は良い事じゃないか?』
- A 確かにな。まあ、偶にはこういう息抜きも必要だよ。リフレッシュってやつさ、リフレッシュ。
- B リフレッシュねえ。……そう言えばさ、昨日、あいつの夢見てさ。
- C 『あいつ?』
- A おう、言ってたな。
- C 『いや、あいつって誰だよ。』
- B なんか懐かしい気分になって来ちまってよ。
- C 『懐かしい気分って言ったって昔から遊んでたメンツってこの三人だけだろ。他にいたっけかな。』
- A だから誘ったのか。
- B うん。なんだか毎日毎日同じことの繰り返しみたいだよ、それこそリフレッシュしたかっただろうなあ。
- C 『なにセンチメンタルな事いってんだ。それに俺にとつての最大のミステリー、あいつ

についての答えを聞いてねえ。』

A あいつもここにいたらなんて言うんだろうな。

C 『おい。今いないヤツの事言ってもしょうがないだろうがよ。』

B いないもんな。想像もつかねーな。

C 『そうだろう。そうだろう。いや、結局あいつって誰よ！ そろそろ教えてくんない？』

B おっ！ ラーメン屋ついたぞ

A 続きはラーメン食いながらだな。

C 『えー。今言おうよ。』

ラーメン屋の店員の声 いらっしやいませ2名様でしょうか。

A、 B はい。

C 『何言ってるんだよ三名だろ……ああ、そうか、あいつって俺の事か。忘れてた俺、死んでるんだった。』

暗転

フリズレ:

登場人物

男 A

男 B

椅子

舞台中央、男 A が「椅子」に座らされている。手は後ろに回されて【「椅子」の背もたれに縛られている。】床には巨大な換気扇の影。ガタゴトと回る音が聞こえてくる。男 A、まどろみから覚醒するように目を覚ます。

男 A ん……体痛い……。

男 A の背後からゆっくりと男 B が出てくる。目深に被られた帽子で、顔は窺い知れない。男 A に影が落ちる。男 A、驚いてとびのく。

男 A ！！

男 B ……

男 A 何？ 何なに？

男 B ……

男 A どうなってんの？ なんで縛られてんの？

男 B ……

沈黙

男 A なあ、お前……！！

男 B 名前は？

男 A ……は？

男 B ……性別は？

男 A ……いや、お前が状況を説明しろよ！ なにが目的なん……

男 B 名前は？

男 A だから！

男 B 性別は？

男 A いい加減にしろよ！ 答えるわけないだろ！

男 B こんにちは

男 A ……

男 B こんにちは？

男 A こんにちは！ ああつ、やめてくれ！

男 A 「椅子」から転げ落ち後ずさる。

男 B こんにちは……は

男 A ああ、いやだ答えたくない

男 B こんにちは……は

男 A ぐっ、弄んでやがる

男 B こんにちは……は

男 A ああ、この野郎……

男 B こんにちは……は？

男 A こんにちは！ くそ……！

息も絶え絶え、男 A 倒れ込む。「椅子」、座らせられなくて困る。男 B、手を差し伸べる。

男 B ファイトー！！

男 A ……仲良しか！

男 B、注射器を打つ。

男 B ファイトー！！

男 A やらないって。

男 B ……ファイトー？

男 A いっぱーつ！！ ちくしょー！！

男 B はあ、どっこいしょ！ どっこいしょ！

男 A おい、マジか……

男 B ソーラン！ ソーラン！

男 A やめろ、やめろよ……

男 B どっこいしょー、どっこいしょ？

男 A どっこいしょ、どっこいしょ！ ああ、答えてしまっう。

男A、息も絶え絶え。男B、男Aに注射を打つ。

男A ああ、もう、

男B ……

男A いい加減にしてくれ。何にもわからん。さっきからなにがしたいんだ？

男A わかりません。

男A ……え？

男A わかりませんと言いました

男A なんだ、誰だ？

男A (名前)です。

男A それは俺だよ。

疑問系ではない。返答はない。

男A なんだ？

男A わかりません。

男B 生年月日は？

男A うるさい！

男A (答える。)

男B、男Aに注射を打つ。

男A 一体、俺になにをしたんだ？

男A わかりません。

男A お前には聞いてない！ というか、お前はなんだ？

男A 私は(名前)です。

男A そういうことじゃない。

男B 今何時？

男A わかりません。

男A 勝手に答えるんじゃない。

男A やめろ、やめろ、何にも考えるな。なにも考えないようにするにはどうすればいい？

男A 不可能だと思えます。

返答は別の人格が行なっている。

男A　なんだ？

男B、男Aに注射を打つ。

男A　ああ、もう、いや……

男B　何歳までおねしょしていましたか？

男A　やめろ、答えるなよ、答え……

男B　何歳までおねしょしていましたか？

男A　言いたくありません。

男A　それはありなのか。……喉がカラカラだ。

男Aに注射器から直接中身を飲む。

男B、壁に向かってぶつぶつと質問を繰り返す。椅子、座ってくれる物を求めて円形に徘徊する。それはまるで入念に準備された儀式のように、踊り狂い、唱え合う。床に映る巨大な換気扇の影はいつの間にか魔法陣に変わっている。なんか召喚されそうな気配。

(台詞とともに、ゆっくりと暗転。)

男A　もう喋るな

男A　なんで指図されなきゃいけないんだ

男A　うるさいうるさい

男A　うるさいのはお前だろ？

(男B　名前は？)

男A　はい、うるさいのは私です。

男A　まあまあ二人とも落ち着いて……

男A　誰だ？

男A　(名前)です。

(男B　性別は？)

男A　だからそれは俺だ！

男A　いいえ、私です。

男A　お前じゃない！

男A　たすけてくれー！

男A　誰だ！　どこにいる？

(男B　何年何月生まれ？)

男 A さっきです。

男 A、 なんだってー！

(男 B 今何時?)

男 A、 嘘です。

男 A 嘘なの？

男 A、 地獄に堕ちろ！

(男 B ここはどこ?)

男 A、 では実家に帰らせていただきます。

男 A、 お父さんは認めませんよ！

男 A お母さん、文房具屋さんはどこに？

(男 B お住まいの地域は?)

男 A、 ここをまっすぐ行って半年先を右に曲がって

男 A 右？

男 A、 助けてくれー！

(男 B 配偶者は?)

男 A、 はーい、みんな集合！

男 A メダカの学校は、森の中

男 A くまさん！ くまさん！ 一匹飛ばしてクモさん！

(男 B 職業は?)

男 A 先生、一人足りません！

男 A、 助けてくれー！

男 A 誰だ！

男 A (名前)です。

まるで6時間くらい経ったかのような疲労感を感じたら終幕

ワロンと鳴くのが犬だろう

登場人物

犬養

猿渡

八鳥

明転

2人の男が立っている

八鳥 遅いなあ、犬養のやつ。アイツが呼び出したんだろうがよ。

猿渡 まあ、まあ。そう言うなよ。アイツだって何か不測の事態があったかもしれないだろ。

八鳥 だからって遅すぎるだろ。6時間は。もう、あたりは真っ暗だぞ。

猿渡 うーん。まあねえ。さっきから電話してるのに出ないしねえ。

八鳥 6時間待ってる俺らも悪いっちゃ、悪いんだけどさ。

猿渡 この場合はもう、一周回って俺らが悪いよね。

八鳥 絶対的にあいつが悪いのには変わりないが6時間待っちゃってるからな。連絡取れないし帰っても良いはずなのに、6時間待っちゃってるからな。でも俺はもう、ここから絶対に動きたくはなかった。負けたくなかったから。

猿渡 負けだよ。6時間は負けだよ。

犬養、遅れてやってくる。

犬養 いや、ごめん、ごめん。遅れちゃって。

猿渡 遅れちゃってじゃねーだろ。この野郎！ 何時間待ったと思ってるんだ！ てめえ！

八鳥 一番怒ってた。え？ なに？ さっきまでのまあ、まあ。みたいななんだったの？

猿渡 あんなこと言っただけ、実はハラワタ煮えくり返るほどムカついてたんだよ！

八鳥 俺の怒りなんて小さいものだったな。

犬養 そんな悠長なこと言っただけでちよっと助けて！

猿渡、犬養の胸倉をつかんでいる

八鳥 おお。落ち着け。猿渡、落ち着けて。犬養だってなんか不測の事態があったかもしれ

ならないだろ。

猿渡 だからって、遅すぎんだろ！ 6時間はよお！ もうあたりは真っ暗だぞ！

八鳥 それ言った。それ俺がさっき言ったから。とにかく離れる。

八鳥、猿渡と犬養を引き離す

八鳥 ったく。そんで？ なんで6時間も遅れてきたのさ。携帯にも出ないし。俺たちは何回も電話したのにな。

猿渡 そうだぞ。折り返しの一つも無いし。これで寝坊とかだったら、臉をホッチキスでとめてやるからな。

犬養 いや、いや、寝坊じゃないんだ。ちょっと相談事があったんだけどね。

猿渡 相談事？

犬養 うん。

八鳥 なんだ。

犬養 うーん。それがこの6時間の間に解決しちゃって。

八鳥 なんだよ。じゃあ、俺たちの待ち損かよ。

犬養 あ、いや、それがさあ、また別の相談事がこの6時間の間に見つかっちゃってさ。

猿渡 別の相談事？ そもそも最初の相談事はなんだったんだ。解決したとはいえ気になる。

犬養 それは……

八鳥 それは？

犬養 犬のことで、ちょっと。

八鳥 犬う？ お前、犬の事で俺たちの6時間を奪ったのか。

猿渡 もう時間泥棒じゃん。

犬養 悪かったよ。

八鳥 そんな犬についてどんな相談だったんだ？

犬養 ああ、ウチで飼ってた犬が死んじゃってさ。どうしようかと思って。

猿渡 死んじゃったからって……そんなに軽く言うことか？ 飼ってたんだろ？

犬養 ああ。

猿渡 だったらなんでそんなに悲しそうじゃないんだよ。

犬養 いや、悲しいよ。

八鳥 とても悲しそうには見えないな。なんて言うか、いつも通りって言うか。

犬養 そうか？

八鳥 お、おう。

猿渡 ま、まあ、その辺は人それぞれだもんな。それで、新しい相談事ってのはなんなんだよ。

犬養 うん。その犬をさ、庭に埋めてやりたいんだけどどうすれば良いかなと思って。

八鳥 ? そんなの、庭に穴掘って埋めてあげれば良いんじゃないか?

猿渡 そういうのって良く分かんないけど最近人間と同じように火葬とかするもんじゃ
ないのか。

犬養 いや、うちの犬はちょっと大きくてさ、中々庭に穴を掘るのは大変なんだよ。それに
訳あって火葬もできなくてさ。

猿渡 大型犬だったってそこまでじゃ無いだろう。どれくらいの大きさなんだ?

犬養 そうだな。大体五十キロくらいかな。

八鳥 なんて体重で答えるんだよ。普通大きかったら、体長だろ。

犬養 体長ねえ、150ちよいくらいかな。

八鳥 150ってちよつとデカすぎないか?

猿渡 ああ。犬にしちゃデカすぎる。

犬養 今考えてるのは、硫酸につける方法かな。でも浴槽が溶けたりしないもんな。どう
思う?

猿渡 知らねーよ。

犬養 燃やしても良いけど庭で燃やすのもなあ。近所の目もあるし。

八鳥 近所の目とかって問題なのか? まあ、それ本当に犬なのか?

犬養 そうだよ。

猿渡 その犬ってのはなんで死んじゃったんだ?

犬養 浴槽で暴れちゃってさあ。それで溺れちゃって。

猿渡 お前、その場にいたのか。

犬養 いたよ。

八鳥 なんで助けなかったんだ?

犬養 実はさ……前々からうるさいと思ってたんだよね。

犬養、ヘラヘラ笑っている

八鳥 いや、でもよお。

猿渡 見殺しにしたってことか。

犬養 どうしたら良いかなって相談だったんだよ。

八鳥 なあ、それどんな気持ちで見てたんだよ。

犬養 どんな気持ちって?

八鳥 飼ってるペット見殺しにして、死にかけてるところ眺めて、お前は平気なのかよ!

犬養 うーん。なんともなかったかなあ。

八鳥 お前なあ!

犬養 ああ、でも、ずっとうるさくてムカついてたからかな、最期のぎゃー! って声は

心地よかったかな。

八鳥 マジか……。お前！

八鳥、犬養につかみかかる

猿渡 やめろ！

猿渡、急いで2人を引きはがす

猿渡 犬養。

犬養 なに？

猿渡 そういう時はな、体をばらばらにするんだ。でっかい牛刀とかってあるか？

犬養 いや、持っていないよ。

猿渡 あー、じゃあ、買ってこい。後から俺らも行くわ。

犬養 そうなんだ！ ありがとう！

犬養、嬉しそうに走っていく

八鳥 おい！ どういうことだよ！

猿渡 落ち着け！ 急いで警察行くぞ！

八鳥 ああ!?

猿渡 お前、知らないのか？

八鳥 何が

猿渡 あいつ……。犬なんか飼ってないぞ。

八鳥 え？

猿渡 それにな、ぎゃー！ とは言わんだろ。

八鳥 は？

猿渡 ワフンと鳴くのが犬だろう。

暗転